

聖 聲

2000年3月号

<主な内容>

新年聖会の恵み(1頁)

牧師リトリートの報告(3頁)

北米ホーリネス教団の歴史(5頁)

OMS Holiness Church of North America

<http://www.omsholiness.org>

Web Version

新年聖会の恵み



南加新年聖会の講師、
中野雄一郎師と本多一米師

今年も、南加、北加の新年聖会から、新しい年が始まりました。南加では、一月八日(土)ランチヨラコスタ教会で、北加では一月九日(日)ウォールナツックリク教会で新年聖会が行われました。南加は、本多一米師、中野雄一郎師を講師に、北加は大谷文三師を講師に迎えました。次に南加でのメッセージのアウトラインを収録いたしました。新年聖会の恵みを共に味わっていただけるなら幸いです。

午前の部

本多一米先生

(司会・鍵和田先生)

主題「きよい心」
(詩篇五一・十〜十三)

時代は目まぐるしく変わるが、いつの時代にも、罪や悪が世の中にある以上、きよめのメッセージは、今もなくてならないメッセージである。

私は、中学生の時、ヨハネ一・九のみことばによって救われた。罪のゆるしは理解できたが、罪からきよ

められるということ、また、自分が本当にきよめられているかどうかということがよく理解できなかった。今は、きよめが神のわざであり、プロセスであると理解している。

ある人が、教会への入会の審査の時に、「救われる前には、わたしは罪を追いかけました。時たま、罪が私を捕まえることがあります。今は、罪から逃げています。」と答えた。クリスチャンも、罪を犯すことがあるが、クリスチャンと未信者とは、罪に対する態度が違っている。

わたしたちは、長いクリスチャ

ン生活の中で、いつしか、「大きな罪」と、「小さな罪」を区別し、たいたことのない罪と考え、それに無感覚になつていないだろうか。ダビデも大きな罪を犯したが、心を硬くして、自分の罪を認めなかった。しかし、神は、預言者を通してダビデの心を砕いた。ダビデは、罪を告白した。「告白する」というのは、「同じ」とを言う」と意味である。神が私について言うことをそのまま受け入れて、同じことを言うのが、告白するということである。罪を神の目で見ることが必要である。

神は、神の観点から見ること、また、他人ではなく、自分を見るように教えてくださっている。この詩篇には、「私」という言葉が、繰返し出てくる。

ダビデが悔い改めて神に願ひ求めたのは、「きよい心」(十節)であった。

一、きよい心は、創造者である神以外に、私たちのうちに造ることはできない。

二、きよい心は、神に対してゆるがない心を与える。ダネカーは、キリストの彫像を造ろうとしたが、二回失敗し、三回目成功した。

ナポレオンは、ダネカーの名声を

聞いて、彼にヴィーナスの像を造るよう命じたが、ダネカーは、「閣下、キリストの像を刻んだこの手は、二度と、異教の神を刻むことはできません」と答えた。私たちも、彼のようにぎっばりと自分を神にささげようではないか。

三、きよい心を持つなら、神との交わりの中に生きることができ(十一節前半)。ヨハネ一・七にあるように、神とのまじわりを持つことができる。

四、きよい心は聖霊を宿す(十一節後半)。ダビデは、サウルが罪を犯し、聖霊を失ったことを知った。ダビデは、「聖霊を、私から取り去らないでください」と祈った。クリスチャンからは完全に聖霊が取り去られることはないが、私たちが聖霊を悲しませることがあり、クリスチャンとしての力を失ってしまうことがある。

五、きよい心は、喜びを宿す(十二節)。罪は、私たちが喜びを奪う。あなたは救いの喜びを保っているだろうか。教会が喜びの場所になっているだろうか。

六、きよい心は、人々を神に導く。キリストのあかし人は、きよい心を持ち、聖霊の力により、喜びを持って、人々にあかしをする

ことができる。パージン将官は、「私はキリストを四十年間知っている。この方によって、過去すべてがゆるされている。私は、あなたがたにキリストを勧める」と軍人に言った。人は、自分が経験していることしか人に伝えることができない。聖書のあかし人は、みな、経験したものをあかしした。中国の農村に住むある人は、白内障の治療を受けるため、二百五十マイルの道のりを、目の見える人が引くロープにつかまって、医者のところに来た。そのように、私たちも人々をキリストのもとに連れて来るものとなるのではないか。



午後の部

中野雄一郎先生

(司会・杉村 幸先生)

主題「ホーリネスの三つの喜び」

(ゼパニア三・十四、十七)

いつも喜ぶことはホーリネスの特徴である。これは、神がわれわれ

れに求めておられることである(テサロニケ五・十六、十八)。ヨシア王が紀元前六二二年に起こした宗教改革を支えたのが、預言者ゼパニアであると言われる。

一、救われた喜び 「あなたへの宣告を取り除き」(十五節前半) 罪を犯したもののゆるしの宣告、永遠の滅びから永遠の命への変化が喜びの原因である。私は今六十歳だが、十六歳の時に得た罪のゆるしの感激が今も輝いている。この喜びのゆえに、私は、倒れても立ち上がることができる。

アメリカに詐欺まがいの商売で大金持ちになった二人の男がいた。彼らが美術館をオープンしたとき、二人の肖像画を並べて掲げた。評論家は、それを見て言った。「二つの絵の真中にイエスの十字架がありませんな。」これは、このふたりをイエスの両側に十字架につけられた強盗になぞらえて、皮肉ったことばだが、私たち、クリスチャンの間には、常にキリストの十字架がなければならぬ。あなたの生活の真中に十字架があるだろうか。

本田弘慈先生がある伝道集会で「三浦綾子さんはもと、娼婦であ

った」と話した。これに対して三浦綾子さんは「私は、娼婦のような心を持っていた」と書いたものであって、それは事実ではありませんが、訂正してください」との申し出があった。しかし、その後、三浦光世さんより、電話があつて、「そのままがいいのです。神の前には、私たちはそのようなものです。神は、そんな私たちを赦してくださいのです。綾子によく言い聞かせておきました」とのことばがあつた。三浦夫妻は、神の赦しをみごとに理解していた。本田先生もその時、赦された喜びを改めて味わつたという。

二、臨在の喜び 「主は、あなたのただ中におられる」(十五節後半)

主は聖霊によって、いつでもどこでも、私のうちにおられる。ヨセフの物語のように、神が、試練の中でも共におられ、それを祝福と変えてくださるということが、聖書の多くのところで教えられている。

主が共におられるというのは、素晴らしい体験である。神はみことばを通して、私たちに語りかけてくださる。あなたは、主が共におられるという経験を大切にしてい

いるだろうか。

私たちが神に応答できるのは、聖霊の働きである。だから、聖霊の働きをさまたげてはいけない。聖霊は、私たちが聖霊を意識していなかった時も、聖霊の働きを受けているが、「臨在信仰」は聖霊の働きを自覚的に受け入れることである。この信仰に立って、喜びを味わってほしい。

三、神に愛されている喜び 「主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」(十七節)

主が私をよるこんでくださっているかを知ることから来る。キリストは、私たちを責めてやまないお方ではなく、私を愛してよるこんでくださるお方である。放蕩息子の父親が彼にしたことを思おう。父親が「喜び楽しむのはあたりまえ」と言ったように、神は私たちを喜んでいてくださる。この神を知る時、私たちは、神の前に安心してあるがままで出ることが出来る。

私の次女は、中学生のころ荒れていたのですが、思いあまって彼女を叩いたことがある。そんな彼女も霊的に成長し、結婚し、子どもを産み、教会で奉仕をするようになった。私は、彼女と、昔のことを

語り合った時、彼女を叩いたことを詫びた。ところが、返ってきた返事は、「わたしはダディに叩かれたことなんかないわ」だった。愛は、赦すばかりでなく、忘れることでもあるのだ。神が、あなたの罪を赦し、過去を忘れ、あなたを受け入れ、喜んでいてくださることを知るうではないか。ここに私たちの喜びがある。

教会成長セミナー

四月一日(土)午前九時より午後四時まで、ウエスト・ロスアンゼルス教会で、教団伝道委員会の企画により、中野雄一郎師を講師に、「教会成長セミナー」が持たれます。主にリック・ウオーレン著「健全な教会へのかぎ」に添った学びとなります。どなたも参加下さい。ランチはウエスト・ロスアンゼルス教会で準備しますので(一人三・五〇ドル)、各教会で参加者をまとめ、三月十九日(日)までに、古山師あて、お知らせください。

牧師リトリートの報告

毎年一月末に行われる牧師リトリートは、教団牧師が寝食を共に一同に集まる、ほぼ唯一の機会です。このリトリートは、牧師の霊的な養い、研修や交わりの場であると共に、教団にとって重要な事柄を研究、審議、検討する場でもあります。いままで牧師リトリートの内容は詳しく報告されることありませんでしたが、「開かれたコミュニケーション」を旨とする、Holiness Web Ministry は、牧師リトリートの報告を皆さんに読んでいただき、皆さんからのインプットを次号に掲載することにしました。以下の報告は、編集子の手になるもので、公式のものではありませんが、できるかぎり客観的に記述するよう努力しました。これをお読みになつての、皆さんのご意見を歓迎いたします。Eメールでお寄せください。

第一日

一月二四日(月)各地より牧師たちがマリブのセラ・リトリート

に集まり、再会を楽しんだ。牧師リトリートには、教団牧師の他、錦織師、信徒牧師の狭間兄、信徒リーダーの安藤兄(二四、二六日)、羽生兄(二五日)、前原兄(二六、二七日)、吉谷姉(二六、二七日)、伊達兄(二七日)、また、佐藤兄(二六日)、渡辺師もインタヴューのため出席した。中村裕二師は永住権インタヴューのため、東ジェリー師は夫人の病気のため、また篠田ダニエル師は病気のため参加できなかった。

夕食後、錦織師が、日語部、英語部が神観においてどのように違っているかについてリサーチの結果を紹介した。各部屋に別れる前にピザ・パーティをして交わりを深めた。

第二日

一月二五日(火)朝の礼拝の後、昼食まで自由時間をとり、各自が午後のディスカッションのための教材を読んだ。それは、ある教会での日語部牧師と英語部牧師の問題をフィクションとして描いたもので、ケース・スタディのために作られたものである。

ディスカッションの後、再び自由時間が与えられ、個人のデボーションの時間となった。あいにくの

雨で美しいリトリート・センターを散歩することはできなかったが、それぞれが思い思いに時を過ごした。

夜のミーティングは、「What did you do?」（ジェスチャー・ゲーム）と聖書の物語からのスキットを楽しみコミュニケーション・ビルディングの時間を持った。その後、サファナンド教会信徒のレストランより取り寄せた寿司を共にいただいた。

第三日

一月二六日（水）午前中は、本多師から、今回のリトリートの主題となった彼の按手礼論文「英語部と日語部の関係に関する一考察」からのハイライトが話された。（この論文の鍵和田師による日本語訳は、ウェブページで読むことができます。）

午後は食事を早めにして、スモール・グループ（七グループ）で話し合い、日語部、英語部別のディスカッション、そして、合同の集会を持った。ここでは、英語部と日語部のコミュニケーションの仕方の違い、両者の関係を良くしていくための努力、教団としてできること、また、両語部が共に働くことの益について話し合われ、それぞれで話し合われたことが分

かち合われた。

日語部は午後四時半より夕食まで夏期修養会のことなどで相談会を持った。

夜は佐藤ステイブ兄へのインタビューがあり、学生牧師として受け入れられた。その後戸田ジョージ師の司式により聖餐式を持った。比嘉師のシエアリングの後散会した。

第四日

一月二七日（木）午前中、按手礼を受ける大倉師、本多師、すでに按手礼を受けている岩永師、土居師の正教師会入会、またローカルハイヤとして応募している渡辺師へのインタビューが行われた。七月の教団総会で大倉師、本多師は按手を受け、岩永師、土居師が正教師会に加えられる。渡辺師のケースについては南加牧師会にゆだねられた。

午後より、中野師の巡回報告と中野師のための祈り、Unordained Assistant についての報告、「葛原基金」小委員会からの報告、他教団から加入した牧師の勤続年数のクレディットにかんする質疑応答などがなされた。

その後、ヴィジョン委員会の伊達兄より、ミッション・ステー

トメントについて、常務委員会の再構成について、常務委員会を「ヴィジョンナリー・グループ」（教理調査、教会開拓、伝道、宣教）と「アドミニストレーション・グループ」（教職任命、財務・年金福祉、教育出版）にわけることが検討されている。常務委員会と教会との関係を形作るため、タウンホール・ミーティングを続け、教団リトリートを二〇〇一年の前半に開催するなどの報告があり、ディスカッションが続いた。これらのことを審議するために、溝口師、米本師、ロバーツ師、前原兄、山下兄、吉谷姉、がヴィジョンナリー小委員会を形成した。

新任牧師のためのマニュアル作成グループの責任者に瀬川師が選ばれた。

日本伝道会議に教団から誰かを派遣することが提案された。

溝口師より、リトリートをふりかえつての所感とその他の報告があり、錦織師の感謝、開拓教会の必要のための祈りがささげられた。来年二〇〇一年のリトリートは一月二九日から二月一日まで、セラ・リトリート・センターで行われ、北加牧師会がプログラムを担当する。



祈りの課題

今年の夏期修養会講師、ヘルムート・シュルツ先生が結腸ガンの緊急手術を一月三十一日に受けられました。前立腺ガンが発見され、その手術を近日中にする予定でしたが、その検査の最中に結腸ガンが見つかり、それをしなければ前立腺ガンの手術はできないそうです。夏の修養会までに回復され、完全に癒されて、修養会のご用ができますよう、お祈りください。

四月一日より七月十日まで、「百日連鎖祈禱」が行われます。教団のため、諸教会のため、開拓伝道のため、また、南米や日本のホーリネス教会のため共に祈りましょう。三月十九日までに、登録を済ませてください。

七月十三、十五日、ポイント・ロム大学で行われる、正教師会、教団総会のために準備している、教団常務委員会および、ホスト役のサンディエゴ教会のため、お祈りください。

東洋宣教会・北米ホーリネス教団史(その十七)

戦中篇(最終回)

オレンジ郡キリスト教会牧師・杉村 宰

さて、いよいよ戦時中を締めくく
りたいと思うのだが、そのテキス
トとなるべき合本「靈聲」を調べ
れば調べる程、そこには宝のよう
なメッセージが幾つも秘められて、
それが泉のように湧いてくる。そ
こで今少し戦時中のものをしたた
めてみようと思つ。

太平洋戦争当時に収容されてい
た信徒、教職者達の状況について
は、「靈聲」に詳しく書かれている。
それは監督の葛原定市先生が発行
人となり、アリゾナ州ポストン・
キャンプの沖本為一先生が書記と
なって執筆されたものである。ガ
リ刷りの機関紙は、各キャンプの
様子とか、大学入学、入隊、結婚
出産、死亡広告、病者、転住等の
個人消息、牧師の消息と問安の様
子、そしてメッセージが掲載され
ているが、それらのニュースは、
キャンプに幽閉されていたホーリ
ネスの群れをどれほど振り立た
せたで事であろうか。

戦時中に書かれた「靈聲」は、
終戦間近い一九四三年末からのよ
うだ(不確かな言い方なのは、戦
時に初めて発行された霊声が紛
失しているからである)。大戦前の
機関紙は、一九四一年六月のこと
であり、真珠湾攻撃の半年前の事
である。つまり戦争という混沌を
経て再発行までには二年近くを要
したわけである。太平洋戦争はた
けなわであつたが、戦況はアメリ
カ軍に優勢とみてか、幽閉されて
いた一世、二世はキャンプから開
放され初めていて、一九四三年に
はコロラド州グラナダ(アマチ)
キャンプの葛原定市先生一家が
シカゴに移られている。実は、既
に自由立ち退きの期間(一九四二
年三月のほぼ一ヶ月間だけ)にロ
サンゼルスから移つていた齒科医
の吉田友次郎兄と、松田早次兄両
家族達の居られたシカゴに合流し
た訳である。もともとロサンゼル
ス教会出身だっただけに、キャン

プに閉じ込められている葛原牧師
達をお呼びしたいと思つたのは自
然の成り行きであつたとも云えよ
う。

また若い二世達は、軍入隊とか
全米各地の大学での学びのために
出て行く場合が多かつたようだ。
ちなみにアマチ・キャンプには、
葛原ファミリー、八尋ジョージ、
黒田章、橋本泰の各牧師、献身者
達をはじめとする二四家族と、二
名の個人が塾居していたが、軍
隊に服務中の者達は、葛原虔他一
四名が名を連ねている。

また「鶴さん、亀さん」で親し
まれた長谷川亀雄兄・鶴姉のよう
に令嬢、光子姉の大学先の都合で、
ハートマウンテン転住所からフィ
ラデルフィア市に移る場合もあつ
た。特に二人はロサンゼルス教
会の成長発展のために尽力し、ま
た鶴姉はロサンゼルス教会の日曜
学校教師として長い間労され、更
に献身すべく、バイオラ大学を一

九四七年に卒業し、戦後はポール
ドウィン教会(サンゲール教会
の前身)の主任として任命されて
いる。

シカゴのレーキサイド教会から、
毎月「教友報」が送られてくるの
だが、つい先月の個人消息の中に、
吉田友次郎兄の召天の記事があつ
た。一月二一日早朝のことであ
る。享年九七歳であつた。吉田兄
はレーキサイド教会の創立に係わ
つた一人であつたが、その後、シ
カゴ近郊のデボン・イエス・キリ
スト教会に移られ、その教会で葬
儀が執行されている。彼はそのよ
うに、長年シカゴでの日系教会の
発展成長のために、献身して来ら
れた兄弟であり、また長年、葛原
ファミリーの牧会を助けて来られ
た方である。兄弟の召天によって、
尚一層の一世の時代との隔世の感
を禁じえないのである。

ちなみに一〇箇所ある転住所の
中で、アーカンソー州のジェロー
ム・キャンプが一九四四年の六月
に最初に閉鎖されている。またカ
リフォルニア州とオレゴン州との
国境付近にあるツールレーク・キ
ャンプは、終戦になつてもまだ閉
鎖されず、一九四六年の三月まで
「勝ち組み」と言われ、日本には

必ず神風が吹いて勝利に導くと最後まで信じていた人たちが収容されていた。彼らはアメリカ側からみれば、一番過激なグループであった訳である。

一九四三年、末広栄司前監督の長兄、和市師はアズサ大学を卒業後、ホーリネス教会教役者として献身し、葛原定市師より按手を授けられている。一九四四年の一〇八号の霊声には、葛原千秋師が、「さる三月、シカゴ市において、父君定市師の司式の下に、渡辺ケイト嬢と聖典を挙げられました」とある。また同年発行の一〇九号には、英語部牧師として最初に赴任することになる黒田章がシカゴのホイートン大学を卒業し、シカゴ教会青年会の指導に当たることになったとある。厭わしい戦争の最中にも、幾つもの慶事がどれだけ一世、二世のクリスチャンの群れを励ましたであろう。戦争の行方はどうあれ、主のために立ち上がった青年達は、それからのホーリネス教会の将来を暗示するかのよう、希望に満ちた大きな発展を遂げる礎石となってゆく。(戦中編終わり)

私の薦める この一冊

牧師先生方から、私たちの信仰の養いになる良書を推薦していただきました。先生方からの原稿が届き次第、霊聲で毎回ご紹介させていただきます。第一回目は、大川道雄先生の薦めるこの一冊です。

カウマン夫人

「潤った園のように」

推薦：大川道雄

みなさま、新年明けまして、おめでとございます。

わたしたちは毎日ごはんを食べ生きています。同じように、信仰にも毎日霊的な食べ物が必要です。皆さんは、ご飯を毎日たべるように、毎日読む、デボーショナルな本を持っておられますか。ぜひ、持って下さい。英語には、何十冊といえるほどの本が出ています。スポルジョンの「朝ごとに」チャンバースの「いと高き方のもとに」そして、カウマン夫人の「荒野の泉」、「山頂をめざして」などはアメリカでもベストセラーに数

えられています。

さて、この度、日本ホーリネス教団より出版された「潤った園のように」を御紹介いたします。

書名：「潤った園のように」(現代語版「荒野の泉」)

著者：カウマン夫人(OMSIの初代の宣教師のひとりで、日本へ来られた最初の宣教師夫人です。)

訳者：酒井美樹(日産自動車本社渉外部勤務)、佐藤信人(中央教会牧師)、錦織 学(米国ニュージャーシー州日本人合同教会牧師)

発行所：日本ホーリネス教団出版局

局

総ページ：五四八ページ

価格：三八〇〇円＋税

「波を通して、雲を通して、嵐を通して、神は少しずつその道を明らかにされる。」これが、この本の最初のことはです。

L・B・カウマンのことは：信仰の歩みを続けて行く中で、主のみ思いはわたしたちの思いとは異なり、主の道はわたしたちの道とは違っていることを学ぶようになります。肉体的にも霊的にも、プレッシャーが大きな力となるのです。状況はわたしたちを死地へと

連れて行くようなものであっても、それが悲惨なことであるとは限らないのです。なぜならわたしたちが主に信頼し、忍耐強く待つならば、その状況は単に、主の全能の力をあらわすチャンスを与えるものとなるからであります。「主のなされたくすしきみわざと、その奇跡と、そのみ口にさばきとに心をとめよ」(詩篇一〇五・五)

これらの本が、早く日本から取り寄せられてみなさんのお手もとに届き、一年を通して霊の糧となるように祈る者です。

南加宣教大会

三月二十五日(土) 午前十時より午後三時まで、サファナンド・バレー教会で「南加宣教大会」が行われます。篠田リリアン宣教師ほか、諸教会から短期宣教師として奉仕した兄弟が、国外宣教の祝福をシェアしてください。チャレンジ・メッセージは古山 隆先生です。詳細は、責任者の鍵和田先生より送られてくるインフォメーションをごらんください。